

第3 問題作成部会の見解

世界史 A

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問

第1問は「世界の史跡」をテーマとし、フランス旅行で訪れた佐賀県出身日本人の墓地と、韓国旅行で訪れたソウル郊外の独立門を題材としつつ、史跡から読み取れる歴史的事象について解答させる問題である。いずれの問題についても、識別力の面で妥当であった。

Aでは、世界の中における日本の位置づけに関する知識について理解しているかどうかを問うた。具体的には、1867年のパリ万国博覧会を素材として、19世紀後半のヨーロッパと幕末明治期の日本との関係を考えさせる問題とした。中間全体として正答率は低かったものの、世界史A全体の平均点を考慮すれば、妥当であったと考えられる。

Bでは、独立門の写真から併合前の朝鮮の歴史について問うた。世界史で学んできた知識と会話文の内容を組み合わせることで解く問題とした。具体的には、19世紀末の朝鮮における「独立」概念を考えさせる問題とした。

第2問

第2問は、「近現代における国のあり方」をテーマとし、Aは石油危機、Bはタイの地図、Cはユーゴスラヴィアの内戦をテーマとした映画を題材としつつ、国家の役割やイメージについて解答させる問題である。

Aでは、1973年の石油危機を素材とし、アメリカ合衆国の経済政策や中東情勢について、世界史で学んだ知識と資料の内容とを関連付けて考察する力を問うた。具体的には石油危機を回顧したアメリカ政府の文書を用いた。中間全体として正答率が低かったものの、いずれの小問についても識別力は高かった。世界史A全体の平均点を考慮すれば、妥当であったと考えられる。

Bでは、タイで製作された地図を素材として、国家や国民といった概念や国のあり方が形成される過程について、資料と知識を結び付けて考察する力を問うた。いずれの小問についても極端な解答結果は出でならず、正答率・識別力の点において妥当であったと考えられる。

Cでは、映画「アンダーグラウンド」を題材とした授業を取り上げた。会話文から読み取れるユーゴスラヴィアに関する情報と、世界史で学習した歴史的事象とを関連付けて考察する力を問うた。

第3問

第3問は、場面設定として旅行を取り上げ、Aはインド、Bはイギリス、Cは中国の歴史事項

を問うものである。また、それぞれの中問は旅した中で出会った体験を基に、メモや会話の読解を通じて歴史的な出来事を思考するよう工夫した。

Aでは、旅行先のメモを読み解きながら、南アジアを代表する河川であるガンジス川周辺の古代から現代までの歴史を、地理的知識とともに包括的に問うた。いずれの小問も極端な解答結果は出ておらず、正答率・識別力の点で妥当であった。

Bでは、ロンドンの大英博物館を訪問した際の会話と、メモの資料とを併せて思考させ正答を導かせるよう意図した設問である。具体的には、1800年頃にギリシアを領有していた国の歴史、資料の読み取り（バイロンの詩の解釈）と当時の社会背景、そして古代ギリシア・ローマの文化とその受容について問うた。いずれの小問についても正答率・識別力の点で妥当であった。

Cでは、中国の首都北京の天安門広場において展開した歴史事象について述べた資料を取り上げ、そこから読み取った情報と歴史的な事象とのかかわりについて類推させることを意図して出題した。

第4問

第4問は、「人やモノの流れに関する歴史」をテーマとし、スエズ運河と中国を具体的事例として、歴史をグローバルな視野で捉えられるかどうかを問うことを意図して問題作成を行った。平均点はやや低めであったが、正答率・識別力の点で妥当であった。

Aでは、スエズ運河についての授業が展開する場面を取り上げ、資料の読み取りを基に、19～20世紀の世界の一体化と各世界のつながりに関する理解を問うた。

Bでは、1880年から1915年までの、中国からの紅茶の輸出量に関するグラフの読み取りを基に、中国大陸の地理的特徴とそうした地域に関する事象について理解しているかどうかを問うた。

3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問

Aは、写真、会話文、絵画資料の読み取りを基に解答させる小問から構成されている。特に問3は、資料から情報を読み取る技能と、印象派についての包括的知識とを組み合わせ思考させることを意図した問題であり、絵画資料そのものを問う工夫が見られると評価された。一方で、問1と問2は単に知識を問う問題となったため、思考力・判断力・表現力等を問う問題作成を心がけたい。

Bは、写真と会話文から読み取って解答する小問から構成されている。特に問5は、歴史的知識と会話文、写真資料から読み取った内容を複合的に利用した上で「独立」の概念について考察する良問であると指摘された。問6は、この時期が日本による併合前であることに気付かせる包括的知識を問う良問であると指摘された。一方、問4は知識を主として問う問題となったので、思考力・判断力・表現力等を問う形での問題作成となるよう心がけたい。

第2問

Aは、資料を読み取って解答する小問から構成されている。問2は事実的知識を問う問題であるが、問1は思考力・判断力・表現力等を問う良問と評価された。問3について、思考力・判断力・表現力等を問う問題に発展し得た可能性が指摘されているが、今後、問題作成上の工夫を追求したい。

Bの問6は、地図をはじめとして複数の資料を総合的に読解させ、「国のあり方」について考察させる思考力・判断力・表現力等を問う良問であるとの評価を得た。一方で、リード文における資料（地図）の解説は減らしたほうが良いという指摘もみられたため、今後はリード文の工夫を検討したい。

Cの問7は、第二次世界大戦に関する基本的知識を問う問題となっていると指摘された。問8は、資料の読み取りと知識とを組み合わせる問題となっており、戦後のユーゴスラヴィアに関する包括的な知識を問う問題であるとの評価を受けた。問9は、概念を問う問題が想定されているにもかかわらず、単純に知識を問う問題になっているとの指摘を受けた。より一層の工夫を検討していきたい。

第3問

Aの問2はリード文中のメモにある空欄に入れる文として適当なものを選択する問題で、知識・技能を問う問題であるが、選択肢が全て正命題であるという工夫がなされているとの評価を得た。

Bは、会話文や詩を読み取って解答する小問から構成されている。問4から問6の全てについて、選択肢の工夫や、リード文と小問の関連性が密接であるという点で評価されたが、特に問5については、資料の読み取りを基に、ロマン主義に関する包括的な知識を活用し、関連性を考察する思考力・判断力・表現力等を問う良問であるとの指摘を受けた。今後とも、受験者の知識と思考をバランスよく問う問題を作成できるよう、努力したい。

Cでは、問9が基本問題であるが、空欄に入る語が「改革開放政策」であることを判断させた上で、二つの資料のうちどちらがそれに該当するものであるかを考えさせる意図で問題を作成しており、思考力・判断力・表現力等を問う良問として評価された。

第4問

Aは、スエズ運河に関する会話文の読み取りと歴史的知識から解答させる小問から構成される。問2については論理整合性、問3については、複数の歴史的事象の関連性を踏まえた包括的知識を前提とした、思考力・判断力・表現力等を問う良問であるとの評価を受けた。

Bは、グラフとその解説文の読み取りを進めながら解答する小問から構成されている。問4は知識・技能を問う問題、問6は事実に知識を問う問題であるとの評価を受けた。一方、問5については、細かい年代の知識がなくとも、リード文やグラフの丁寧な読み解きと、基本的な歴史的知識により解答に至ることができるよう工夫された点で、技能を問う問題として良問であるとの評価を受けた。基本的な知識を基にしつつ思考力・判断力・表現力等を問うことが可能な問題を作成できるよう、今後とも工夫を重ねたい。

4 今後の問題作成に当たっての留意点又はまとめ

以上、問題作成部会として、各問の出題意図と、設問に対して寄せられた意見・評価に対する見解を述べてきた。最後に総合的な意見・評価についての問題作成部会の見解を述べ、問題作成に当たっての留意点についてまとめておきたい。

まず分量としては、受験者が余裕をもって時間内に解答できる適切なものであると評価された。難易度についても、平均点が昨年度より低下したものの、適切であったとの評価であった。

出題のバランスについては、地域別では、ヨーロッパ・南北アメリカで26%ほど、東・内陸アジアが30%ほどと、あわせて半数強となった。分野別では、政治史を中心とした問題構成となり、こうした偏りが科目の特性上やむを得ない部分もあるが、バランスの点でより一層の改善を図るべく取り組みたい。時代別では、世界史Aの特性を踏まえ、近代から戦後にかけての時代に重点を置き、古代・中世にかかわる問いは3問に抑えた。

共通テストで問うべき力としては、単純な知識を問うのではなく、資料の読み取りや文章中からの情報収集を基に、文脈を踏まえながら論理的な整合性から正答を導く設問が求められるところである。本部会では、リード文や資料を見ずに設問文だけで正答が導き出せる出題を脱却することに努

めたが、グラフ・資料に関しては、全体を通じて「知識を踏まえて歴史的事象相互の関連性等を考察させる非常に良い設問」との評価が得られ、部会としてこの点の改善に注力したことが功を奏した。グラフ・資料等の読解から因果関係を導き出し、論理的に思考することによって正解にたどり着く設問の工夫を継続すべきとの要望もあり、引き続き部会として改善を心がけたい。また、リード文の会話文や解説などに関しては、各設問との関連が以前より深まったとの評価であった。同様に、大問のテーマと小問との関連性をより深める問題構成を意図したが、これについても高い評価を受け、今後ともこの方向性を推進するよう注力したい。

「世界史A」の学習指導要領・教科書のテーマに即した作問に細心の注意を払ったことは言うまでもないが、さまざまな指摘・意見を踏まえつつ、単純な知識問題に帰結することなく、基礎的な歴史知識を活かした歴史的思考に基づいて解答できるような、受験者の思考力・判断力・表現力等を測定しうる設問を考案するよう、今後とも問題作成の改善に努めたい。

世界史 B

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問

第1問では、「歴史の中の女性」を題材とし、各国の女性参政権の獲得状況、6世紀中国の女性について考えさせることを目的に、問いを作成した。正答率にばらつきがみられたが、おおむね妥当な設問であった。

Aでは、各国の女性参政権の獲得状況を題材とした授業の場面を取り上げ、その背景となるロシアの歴史、第一次世界大戦などについても考えさせることを意図して出題した。

Bでは、6世紀にある中国人の記した女性に関する記述を基に授業が行われている場面を取り上げ、中国の歴史的事象を理解した上で、資料と会話文の読み取りが適切にできるかどうかを問うた。

第2問

第2問は、世界史上における君主の地位の継承をテーマとし、Aはフランス王位の継承、Bファティマ朝のカリフについて考えさせることを意図して問題を設定した。全般的に、正答率は平均的であり、識別力も妥当であった。

Aでは、ブルボン家の紋章と家系図を題材として、紋章が示すものを読み取り、王朝間の繋がりとそれぞれの王朝の特徴について考えさせることを意図して出題した。

Bでは、ファティマ朝のカリフに関する二人の歴史家の所論を取り上げ、的確な読み取りを基にして、イスラーム世界の政治的変容についての理解を問うことを目的に問題を作成した。問4、問5については、識別力の高い問題であった。問6については、正答率が7割を超えているものの、成績中上位者と成績下位者を識別する問題となっている。

第3問

第3問は、場面設定として様々な教材研究を基に行われている授業を取り上げ、Aでは、フランス大統領の演説の資料とナポレオンの帰還を描いた図版を基に行われている世界史の授業を、Bでは科挙を題材とし、日本との関わりに言及しながら行われた世界史の授業を、Cでは中国の書籍分類の歴史について学生と教授が対話している場面を取り上げた。

Aでは、19世紀前半のヨーロッパと植民地との歴史的事象に関する基本的な知識を理解しているかどうかを問うた。中間全体として正答率は妥当であったと考えられる。

Bでは、中国の人材登用制度である科挙に関する会話文を基に、中国史における学問・思想の展開と、日朝の知識人による中国の制度に対する多様な評価を理解させることを目的とした。いずれの小問についても極端な解答結果は出ておらず、正答率・識別力の点でおおむね妥当であっ

た。

Cでは、中国における図書分類の変遷に関して、歴史書を分類する史部が儒学の經典から独立し、四部分類が成立していく歴史的背景に注目して問題を作成した。

第4問

第4問では、資料が示す事柄や資料に記載されている具体的な内容を題材に、Aはウマイヤ朝の貨幣発行における模倣と改変、Bは古代ギリシアの有名な史実の検討、Cはイングランドの語源とキリスト教との関係について、解答させる問題である。

Aでは、ウマイヤ朝の貨幣がビザンツ帝国の模倣から独自の図柄に改変した事実を断片的に捉えず、ウマイヤ朝の諸政策との関連の中で考えさせることを意図して問題を作成した。

Bでは、マラトンの戦いで勝利を伝えたと言われる使者に関して、複数の資料を取り上げた。資料から読み取った内容を、古代ギリシアに関する歴史的知識に関連付けて考察する力を問うた。正答率はやや低い設問があったものの全体的なバランスは取れており、識別力はいずれも妥当である。

Cでは、ブリテン島のある修道士によって記された著作を基に、複数の異なる視点からなる三つの資料を取り上げた。小問としては、資料の比較から同一用語の意味の変遷を読み取らせるもの、読み取りより資料の年代配列を問うもの、これらをより概念的に捉えさせる設問（キリスト教が社会に与えた影響）とした。いずれの小問についても、正答率・識別力の点で妥当であった。

第5問

第5問は、歴史統計をテーマとし、Aは東南アジアの植民地における貿易統計、Bは産業革命期のイギリスにおける人口統計を用いて、当時の社会経済の状況やその歴史的変化を考察させる設問とした。

Aでは、1929年の東南アジアにおける貿易統計を題材として、植民地体制下のアジアにおける宗主国の役割および社会経済の構造を考察することを目的として出題した。問2は正答率が高く、識別力の点で改善の余地があるものの、それ以外の小問の難易度・識別力は妥当であった。

Bでは、「歴史を学ぶ上での統計資料が有する役割」をテーマとした。イングランドにおける都市や農村の人口比率を示した表、および移民数の推移を示すグラフや資料を基に行われる授業を場面として取り上げた。正答率・識別力ともに妥当であった。

3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問

Aは全体的にバランスが取れていたといえる。実際の正答率は三つとも平均的なものであった。また問3が、女性参政権や自治領の形成など19世紀から20世紀初頭にかけての大英帝国の包括的な知識を問う良問との評価を得られた。

Bの問5は、資料として取り上げた『顔氏家訓』の内容を読み取った上で、中国の唯一の女帝である則天武後の出現をこの時期のトピックとして理解していることを前提に仮説を導き出すような問題を作成したため、論理整合性を問う良問との評価を得た。

第2問

Aでは、問1の紋章の図柄を読み解く問題が思考を問う問題と評価された。しかし、問3に関しては直接的でない命題にすることで思考を問う問題にできたのではないかとの指摘を受けた。この点に関しては、今後の改善すべき点として留意したい。

Bでは、問6について、歴史的な用語の概念的理解を深化させる優れた問題として高い評価を得た。また、問4についても、知識だけではなく思考力・判断力・表現力等を要する問題として

評価された。

第3問

Aは、図、会話文、地図の読み取りを基に解答させる小問から構成されている。問1は図や会話文の丁寧な読み取りを、問2はナポレオンを中心とする近代フランスと関連する地理的理解を求めているが、両問とも単純に知識を問う問題となったので、今後はさらに中間全体が思考力・判断力・表現力等を問う形になるような問題作成を心がけたい。

Bの問3は包括的な知識を問う問題、問4は思考力・判断力・表現力等を問う問題との評価を受けた。問5は知識と読み取りの技能を問う良問であるとの評価を得た。一方で、選択肢に明らかな誤命題がある点に改善の余地があるとの指摘も受けた。今後も指摘を踏まえて、さらなる改善に注力したい。

Cでは、問7について教科書知識を根拠に論理整合性に基づいて推論する、思考力・判断力・表現力等を問う問題として非常に優れているという高い評価を得た。問8は、知識を踏まえて丁寧に読み取り、整理することが求められる良問との評価を得た。問題形式、内容、正答率、全て適切であったと考える。

第4問

Aの問2は、歴史事実の内容から帰納して得られた政策の共通目的を、時代の大きな流れに位置づける歴史的な思考力が求められる。各メモの正誤判断に関して、中上位群と最上位群の受験者はこのメモの正誤に迷い正答率が二分化したようである。今後は、知識ではなく資料の読み取り、または解釈の妥当性などに判断点を置いた選択肢となることを心掛けたい。

Bでは、問3および問5は、初見の資料であっても、高校での学習した知識を踏まえて歴史的思考力や論理的整合性を問う良問と評価された。問5は正答率がやや低かったものの、識別力は非常に高く、このような問題を今後も作成していきたい。

Cの問6は、歴史の用語が概念的知識であることを受験者に気付かせる、非常に優れた問題との評価を得た。問7についても、資料から読み取った情報を基に、複数の資料を関連付ける思考力・判断力・表現力等を問う良問とされた。問8は、時代を特徴づけるような影響など、概念的な理解を問う問題に発展させることが可能との助言をいただいた。以上の指摘を参考に、受験者の知識と思考をバランスよく問う問題を作成できるよう、今後とも工夫したい。

第5問

Aの問2は、正答率が高かったことから選択肢に工夫が必要であったと思われるものの、知識とそれを基に資料を丁寧に読み解く力が求められた良問との評価を得た。問3は、統計や会話文から読み取った情報を、歴史の知識を踏まえて思考することを求める良問であるとの高い評価を受けた。

Bは、グラフや表を読み取って解答させる小問から構成されている。問4は、資料と会話文の読み取りに必要な技能とイギリスの社会経済に対する包括的な知識が求められる問題であるとの評価を受けた。問5は、グラフの読み取りと知識を組み合わせた知識・技能を問う問題であるが、過去に繰り返し出題されてきたテーマであることから、テーマ選択の工夫が求められるとの指摘を受けた。問題作成に当たっては留意したい。問6は、イギリス産業革命について正しい文を選択する問題であり、事実に知識を問う問題と評価を受けた。いずれの小問についても、正答率・識別力の点で妥当であった。

4 今後の問題作成に当たっての留意点又はまとめ

以上、問題作成部会として、各問の出題意図と、設問に対して寄せられた意見・評価に対する見

解を述べてきた。最後に総合的な意見・評価についての問題作成部会の見解を述べ、問題作成に当たっての留意点についてまとめておきたい。

分量については、リード文の文章量が増加したため、多すぎるとの指摘とともに、「試験時間に見合った適切なもの」との評価も得た。ただし、不要な表現がないか等、今後とも文章のスリム化を心がけつつ問題作成に当たりたい。

出題のバランスについては、地域別ではヨーロッパ・アメリカで半数ほどを占め、東・内陸アジアが30%弱でこれに続く。時代別では、近代以前が21問、近代以降が11問で、複数の時代をまたがって聞いたものが2問であった。難易度については、問題作成時の予想通り平均点は昨年度と比べて下がったが、日本史Bや地理Bと比較して同水準となり、「大学入学希望者の学力を測定する試験として適切なもの」との評価を受けた。

リード文や資料と設問との関連性に関しては、これまでも注意を払ってきたところであるが、大問や中間のテーマに沿ってリード文と資料とが密接な関連をもって作成された良問であるとの好意的評価を受けた。

資料・グラフ等については、文科省が示した基本的な考え方にある「資料やデータ等を基に考察する」ことを重視しつつ、グラフ、写真、文章資料など多様な歴史資料を提示することに努めた。また、資料読解に基づく考察や内容の理解を伴う包括的知識を問おうとする問題作成にも努めたが、論理整合性から正答を導くための工夫や、既存知識に新しい理解を与える非常に意欲的な問題であるなどとして、高く評価された。本部会では、高校の授業現場に良質の教材を提供し、かつ受験者に新たな気付きを与えうる問題を作るべく努力した結果であろう。

しっかりとした歴史の知識を前提として資料を読解し、思考させるという本部会の問題作成の意図に対しては、「高校生が身に付けるべき世界史の知識のあり方に対する出題者からのメッセージ」を読み取ってもらえ、励みとなった。しかし、これに満足することなく、単純な事実的知識ばかりではなく、その歴史的事象の内容や因果関係など内容の理解を前提とした包括的理解を問う問題、さらには歴史的事象が持つ意義や意味などの概念的理解を問う問題作成の工夫を今後とも継続したい。ただし、今後の問題作成に向けての要望としては、第一に多様な解釈が可能な歴史分析概念を考察するような問題を作ってほしいということ、第二に地域・時代のバランスを取る努力を続けてほしいとの指摘があった。今後も、こうした要望を踏まえながら、良問の作成を目指していく。

「世界史B」の学習指導要領・教科書のテーマに即した問題作成に細心の注意を払ったことは言うまでもないが、さまざまな指摘・意見を踏まえつつ、単純な知識問題に帰結することなく、基礎的な歴史知識を活かした歴史的思考に基づいて解答できるような、受験者の思考力・判断力・表現力等を測定しうる問題を作りたい。また、資料やリード文から読み取れる情報を基にして、既習内容から得られた包括的・概念的理解を踏まえつつ、論理的に考察し構想することで正答にたどり着く問題を考案するよう、今後とも問題作成の改善に努めたい。